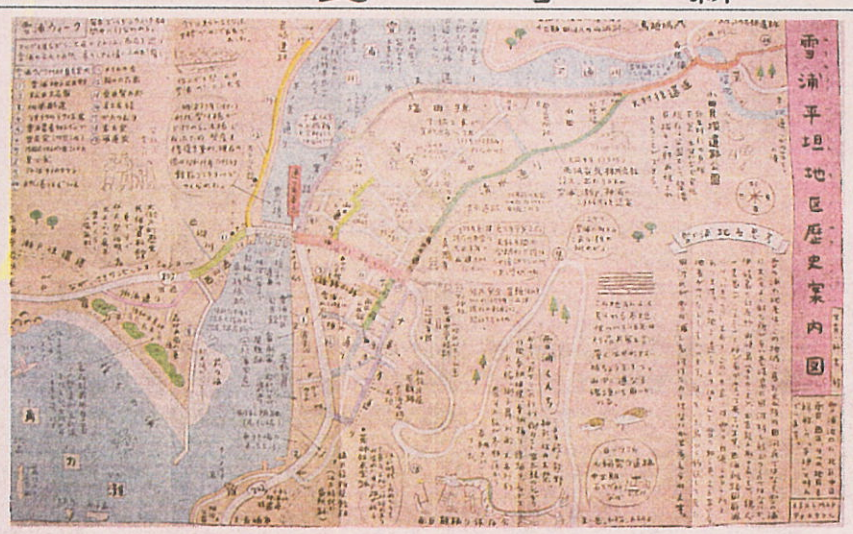
崎近郊
7・52・3420）
7・74・2043）
9・22・0352）

通り名付け 案内板設置

大瀬戸「雪浦ウィーク」準備着々

西海市大瀬戸町雪浦地区に点在する作家の工房や商店、豊かな自然を訪ね歩くイベント「雪浦ウィーク」（5月1～4日）に合わせ、由緒ある地名などを基に名付けた「通り名」計16の案内板が同地区53カ所に設置され、町の歴史PRに一役買っている。



通り名や町の歴史を記した「雪浦歴史通りMAP」

設置された通り名の案内板
＝西海市大瀬戸町雪浦下郷

塩浜通り、大村往還道…「町歩きで歴史に親しんで」

同ウィーク実行委（渡辺美佳会長）と国土交通省長崎河川国道事務所が企画。住民に地域への愛着を持ってもらい、同時に、イベントを訪れる観光客の道案内として活用してもらおうと初めて取り組んだ。

木製の案内板に通り名と、位置確認ができる番号を表記。番号は国道に架かる雪川橋を基点に、そこから最も近い各通りの端を「#0」に設定。例えば「#16」は通りの端から160㍍の地点を示す。地元の画家、タナカタケシさんが作製し、通りの街灯や石垣などに設置した。

通り名の名称は江戸時代から使われていた「字」名などを基に命名。塩田跡そばの「塩浜（じば）通り」、砂浜近くの「州浜（すばま）通り」、雪浦から大村への江戸時代の街道として利用された「大村往還道」など、雪浦の歴史や景観を反映、観光客にも分かりやすい名前となるよう工夫した。

通り名が付いた案内地図5千部を作製し、イベント期間中、雪浦地区公民館などで配布する。渡辺会長は「町歩きを通し、雪浦の歴史を感じてほしい」と話している。

二人三脚で創作「魅力伝えたい」

岩永さん夫婦

『雪の浦窯』初開放へ

西海市大瀬戸町雪浦幸物郷の陶芸家、岩永志朗さん（36）が、同町のイベント「雪浦ウィーク」に合わせ、自作の登り窯がある工房「雪の浦窯」を初めて一般開放することになった。妻、加奈さん（28）も作品作りに協力、夫婦二人三脚による創作活動が始まった。

「多くの人に焼き物の魅力を伝えていきたい」と話す岩永さん夫婦　＝西海市大瀬戸町雪浦幸物郷

岩永さんは長崎市出身。福岡大在学中に美術部で陶芸に目覚め、卒業後、佐賀県立有田窯業大学校に入学。3年間、本格的な修業を積んだ。2001年10月に父親が所有していた同郷の土地に移り住み、半年かけて登り窯を製作。工房は開放せず、有田市の知人の店で作品を販売していた。

07年5月から約2年間、「海外の暮らしを体験してみたい」と青年海外協力隊員に応募し南米ボリビアで焼き物制作を指導。昨年9月に帰国後、現地で同じ隊員として看護師をしていた加奈さんと同11月に結婚し、陶芸活動を本格化することにした。

工房は同郷の細い林道を分け入った山中、岩永さんのおじが経営する「雪の浦手造りハム」のそば。作品は、唐津焼や備前焼を思わせる素朴で力強い作風が特徴だが、妻の加奈さんも看護師の仕事の傍ら作品づくりに協力。収納や洗いやすさといった機能性やデザインなど、女性の視点を盛り込んだカップや皿、どんぶりといった食器類を販売する。5月中旬から陶芸教室も開く予定という。

岩永さんは「雪浦ウィークをきっかけに、多くの人と交流し、焼き物の魅力を伝えていきたい」と意気込んでいる。問い合わせは（電090・5779・2215）。

（内野大司）